

## 熊本大学学術リポジトリ

## Kumamoto University Repository System

Title	悪夢：創作
Author(s)	柴田，仁；[シバタ，ヒトシ]
Citation	龍南， 2 2 1： 4 8 - 6 3
Issue date	1932-03-01
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/7058">http://hdl.handle.net/2298/7058</a>
Right	

# 悪夢

理一甲二 柴田 仁

先生 私が此所で御世話になり始めてから、一月たちました、えゝ丁度一ヶ月目の夜ですわね、一ヶ月前の夜。あの夜はとも冷たい氷雨の降る夜でしたわ。そうです。街燈が霧に包まれてゐる様に薄明く輝いておました。アスファルトは濡れて、エナメルをト流した様でした。

夜遅くー 何時頃でしたつけ。今時分じやなかつたかしら。矢野に伴はれて先生の所に参つたものです。とてもひどい咯血でした。

私、自分の吐き出した血のついてゐるハンカチを見て、何だか不思議な氣のしたのを覚えてゐるわ。私の体―壊れた器械の様な汚れきつた私の体の中にもこんな美しい新鮮な色彩を持つてゐるものが残つてゐるなんて。私、ハンカチを擴げてじつと見凝めてゐると、それが眞赤な花瓣を畫いてゐるのを發見したんです。

それは罌粟の花を聯想しますが、もつと複雑な組織からなつてゐる花の繪畫の様に思はれたのです。どんな偉らい畫家だつてこんなに新鮮な、スリルな感情を現す事は出来ないだらうと思ひました。矢野はハンカチを見詰めてゐる私を見て、何をしてゐるんだと尋ねました。私の思つてゐる様な事、あの人なんか話しても分つてはくれないでせう。あの人の神經は、あの人の体の様に頑丈なんですから、私は苦しいのを無理に我慢して、微笑んで見せました、そして何でもありませんつて言ひました。私あの時は矢野を信じきつてゐましたから、あの人に心配をかけたくなかつたんですわ、そんなに私が思たてゐるのに、あの人つたら……私を……

いゝえ、先生、私、昂奮なんかしてゐませんわ、それに今夜はとても氣持が良いんですの。お世話になつたのですから、是非聽いて下さいね。私、そうすると、胸の中に溜つてゐた物を吐き出した様に氣持が良くなると思ひますわ。

先生、有難うございます。水の甘かつたこと。

續きを聽いて下さいね。矢野に限つてと思つてゐたのが、私の間違ひでした、もつとも私の様に萎びた花の様な、ウェートレスよりも、快活なお嬢さまが好きなのは當り前かも知れませんが、でもあんまりひどいと思ふわ、私が此所へ入院してから一度見舞に來たきり、姿を見せないなんて、そうすると、今日の手紙です。先生、私の枕の横にあるでせう。どうか讀んで下さい。随分得手勝手です。

私が病氣で動けないと知つて、あんなに書いて來るなんて、先生、あの人は私の病氣が怖いので、誰だつて嫌がる病氣ですもの、でもあの人は私の病氣を知つてゐたのです。そして、私に、僕の力の及ぶ限りの事をして、貴女の病氣を癒さうと言つてくれました。私、單純でしたわ、馬鹿でしたわ、そんな事が涙が出る程嬉しかつたんですから。

君の病氣はゆつくり、焦らずに癒さなければいけない。だから君——君を愛してゐる僕の爲にも、良くななければいけない此所に××圓の小切手を——

馬鹿にしてるわ、手切金！

あの人きつと今頃は何處かのお嬢さんの唇を盗んでゐるでせう。私——

先生、もう私に寝なさいとおつしやるの。私、少しも眠くないんですもの、先生、後生ですから、もう三十分ばかり、私の横にゐらつて下らない？ 私、今夜、とても淋しいの。若し先生に行かれたら、私眞暗な世界に唯一人殘されてゐる様な氣がするに違ひないわ。私、こうしてゐても、眼をつぶると、眞黒な大きな穴が私を飲みこもうとしてゐるのがはつきり見えるの、昨夜の夢でしたわ。私、たつた一人で冷たい岩窟の中に坐つてゐるの。一本の裸蠟燭がゆら／＼としながら、鈍い黄色の光りをして輝いてたわ、そして私の心臓の音だけが——それは靜けさを破つて規則的な時計の様な音でした。私はそれをはつきりと聽

きました。私は無意識的にそれを数へ始めておりました。1、2、3、4、……

私は急に身体が冷たくなる様な気がしました。慄へ始めました。私は恐くてたまらなくなりました。私は聲を立てようとしたが、どうしても言葉が出ないのです。其時天井が急に二つに割れ、大きな穴が出来ました。そして非常な勢で落ちて來ました。不思議な事には、私にそれがはつきり見えなです。私は何か悲鳴を出した様でした。そしてべつとりと冷汗を出してゐる私をベットのの上に見つけたのです。私はそれが運命を暗示してゐる様な気がしてならないのです。

夢なんか氣にしちやいけなとおつしやるの？ 怖い夢は却つて良い事がある前兆ですつて？ でも私。退屈でたまらないですから、何時も私といふ者の過去と現在と未來——之は未だ分りませんが——分析して考へて見たんです。

思案つて言ふ程でもありませんわ、そうね、私の過去は餘り幸福じゃなかつたわ。どうやら小學校だけは卒業しましたけれどお友達が女學校へ行くのが、羨やましくて泣いた事を覚えてるわ。私には兄弟がありませんでした。父は私の幼い時に亡くなつて、私は顔さへ記憶にありませんわ、母は紡績工場で働いておりました、母は私をよく可愛がつてくれましたわ、でも私が小學校を卒業した頃は、母は軽い咳をするやうになりました。母は働いて歸つて來ると、火鉢に凭たれかゝりながら、何所かを睨む様な様子をして。じつとしておりました。それが餘り長いと、私は母が化石になつたんじゃないのかしらと怖くなつて、小さい聲でお母さんと呼ぶのでした。すると母は夢から醒めた様に、周圍を見廻しながら、私を見て微笑まうとするんですが、肉の落ちた頬が石膏の様に固くなつて薄い唇の縁に皺を作るのでした。私は以前の母と同じ人だらうかしらと疑ひたい様な氣持がしました、以前は時々、子守唄とか話をしてもらつて、私は母の低い男のバスの様な聲を聴きながら寝た事がありました。でも今は家の中は沈黙だけがあるのでした、がらんとした墓場の様な空虚な感じが漂つておりました。私も間もなく或る工場へ働きに行きました。勞働といふ事がどんなに私の体に苦かつた事せう。私は生來餘り体が強い方じゃなかつたのです、でも私は母の病氣を知ると私は家でじつとしてゐる事が出来なかつたのです。

陰氣な設備の悪い工場でした、私は立つて働いてゐる中に、足が棒の様に、冷たくなつてゆくのを感じました、母はとう／＼

床についてしまいました、母の病氣は過勞が原因でした、そして母の体には無數の黴菌が巢くつて居たのです、母が倒れるとそれが非常な勢で活動し始めました。病氣は日毎に悪くなつてゆきました、私がぐつたりとなつて歸つて來る時、母は天井を何時もじつと見てゐました、顔を少しも動かさないで、本當に天井に何かあるのかしらと思つて、私も見上げた程でした、生活はいよく苦しくなつて來ました、私は人間つてこんな苦い事に逢ひながら、やつぱり生きてゆかねばいけないのかしらと、考へました、私の境遇は「シンデレラ姫」の様な夢見る様な氣持にはどうしてもしてくれませんでした、此世に果して希望といふものがあるのかしらと、思つてゐました、母は何時も黙つて居ました、私も話かける氣になれませんでした、二人の間は何かしら、打ちとけられない空氣がありました。勿論第三者には分りはしなかつたでせう、近所の人は何時も私を孝行娘と呼んでゐましたから。

或夜の事でした、母は珍らしく、私にはつきりとした聲で優さしく話かけました、そして私の世話に感謝されました、私は何かしら茫然とした氣持で、うつむいて居ました、すると母は急に、私に經文を讀んでくれといふのでした、私はぞつとしましたそして母の顔をじつと見凝めました、母は微笑みさへ浮べて、私を見ました、私は低い聲で經文を讀みました、母は眼をつむつてゐました。聽いてゐるのか、眠つてゐるのか分らない程靜で、私の聲ばかりが反響してゐました。私は讀みながら、泣けて仕方がありませんでした。今にも母が亡くなるのではないかしらと思ひました。一週間程してから、母は亡くなりました、冷たい手で私の手を握りしめ、そして咳く様に唇を動かしましたが、何を云つたのか聞こえませんでした。其時の表情に以前の母を發見しました。私はお母さんと言つて泣き出しました。

しばらくたつてから氣が落ちつきますと、私は之からどうしようかしらと思ひました。たつた一人ぼつち、母の死！ 惡辣な資本主義の犠牲になつたのです。私にはそれがよく分つてゐました。それと同じく母と同じ病氣が私の中に存在してゐるといふ事も氣づいてゐたのです。私は肉体的に戰闘的にはなれないのでした。私は卑怯でした。私は社會の矛盾を良く感じながら、私の感覺の麻痺を求めたのです。殘る所幾何もない命、そう思つて私は、自ら痴情の世界に飛びこんで行つたのです。現在の社

會を見ますと、私達の進むべき道は大体二つの様です。マルキストたるか、利那主義たるか。ね。先生、私の道は間違つてゐたでせうね？ 餘りに個人主義的でしたわね。逃避的でしたわ。

私は大膽さですぐに評判になりました。私は今まで注意しなかつた私の顔が、かなり美しい事に気づきました。そして金のありさうな人達に近づいては、有りつたけ絞つてやりました。私はそれを元の私の家の近所の困つてゐる人達に贈りました。何だか鼠小僧ばりで一寸嫌な氣がしましたが、男性の方が私に親切にして下さると、きつと私の肉体を要求するのです。いえ私の肉体といふ物を前提として、親切にするのです。私には彼等のカラクリは見えずいてゐました。彼等は私をうまく欺したと思つてゐたでせうが、私は心の中でそれを嘲笑してゐました。でも餘りに惨ない嘲笑でした。私は自分自身がとても嫌なものに思ひましたわ。ナイフで突いてく傷だらけにしてやりたいとさへ思ひましたわ。

然し亦次の瞬間には金のある男性との戦ひ—文字通りの—でした。それがせめてもの私の境遇からの反抗でした。でも私は自分自身の姿で眞珠夫人を聯想した時は、とても不愉快な氣持になりました。

私は又或時ふと教會の門をくぐつた事があります。私は目だたない服裝をしてゐましたので、誰も私の職業を察した人はなかつた様でした。私はどんなつもりで行つたのでせう？

殊勝な氣持じやなかつでせう。どんな嘘を眞面目くさつて言ふか見たいと思つたのでせう。牧師はいと嚴かに讀んでゐました。信者はうなだれてだれて居ました。

### —ルカ傳第十一章

イエス某所にて祈禱しけるに、畢りし時一人の弟子言ひけるは『主よハネ其弟子に教へ如く我儕にも禱る事を教へたまへイエス曰ひけるは祈る時は斯くいふべし天に在す我儕の父よ……』

先生、どう？よく覺えてゐるでせう。其時は眞面目な有難さうな顔をして聽いてゐましたが、心の中ではこんな鹿瓜らしい格好をしてゐても、一皮むけば、醜い性質がひそんでゐるんだと輕蔑してゐました。それによくあんな顔が出来るものだと感じし

てゐました。教會の人達から言はせますと、確に私は惡魔でしたわ、横光利一さんの小説に之とよく似たのがありましたわね。

私は嚴かな若い牧師に興味を持ちました。そして説教の中にある事實を本當に信じきつてゐるのかしらと疑ひたくりました。私はそれから教會へ行き始めました。神を信じる代りに神を嘲笑しに、そして間もなく牧師と交際をするやうになりました。勿論職業とか名前なんかは出鱈目でした。牧師が私に魅きつけられ出したと思ふと、私はわざと冷淡な様子をしました。牧師は教會の手前もあり相當苦しんでゐた様でした。そして私に一寸話したい事があると言つて、そつと私に目くばせしました。私はいよく來たなと思つてゐました。私と牧師と二人つきりになると、彼は私を愛してゐると言ひました。神に仕へてゐる彼の言ふ事は、やつぱり普通の人と表情も言葉も異りはありませんでした。

私はくすぶつたい氣持でゐました。牧師は私の爲なら、どんな事でもすると言ひますから、それでは宗教を否定しなさいと冷く言つてやりました。彼は私の言葉を聞くと、眞赤な顔をして憤りました。そして私の心が本氣かどうか確めるやうにじつと私を見ました。私が平氣な顔色をしてゐるのを見て——もつとも私だつて、彼がどんな事をするか内心怖かつたんですが——今度は眞蒼な顔をして、ぶる／＼指を振はしてゐました。私は怖くなつてすぐ表へ飛び出しました。後から私を呼ぶ彼の聲もきかないで出たのでした。後で考へて見ると、随分ひどい惡戯と思ひ、牧師に氣の毒と思ひました。でも私の氣持としては、こんな社會で神といふものが、どうしても信じられないのでした。

レーニンは宗教は阿片なりと言つてゐますが、それと同感した事も事實ですけれど、ほんの惡戯でした。そしてどんな堅く見える様な人だつて結局女性の肉體を求めてゐるのだと云ふ事を確信しました。

そんな頃知つたのが、矢野でした。あの人金があり、体はあんなにがつちりしてをり、とても男性的でせう。それにラブ・ハントーとしても有名でした。私の友達にもあの人に捨てられた人がゐたわ、でも其お友達は矢野をちつとも恨んでゐないの。そればかりでなく。あの人の事を辯護するんでわ、私、變な氣持がしましたわ。其人は溜息つきながら云ふんですの。矢野さんとても私に親切にして下さつたわ。あの方はとても良い方なんです。あの人に色んな噂のあるのは、女性の方からあの人を無理に

自分の愛で引きつらうとしてゐるからなんですわ、あの人は何時も私を愛してくれてるわ、あの人の心は一寸移つても、結局私の所へ歸つて来るわ、ねー先生、こんな風なんです。先生、熱心に私の話聽いてゐて下さるのね。私嬉れしいわ。

私は女性として、矢野を憎まずに居れないと同時にあの人に對して好奇心を持った事も事實です。不思議な矢野の性格！私は矢野といふ人物に是非逢ひ度と思つてゐました。或る夜更けぶらりと這入つて來たのが矢野でした。隅つこのテーブルに腰掛けて何か考へこんでゐる様な様子でした、私の例のお友達は嬉れしさうに彼の所へ行くのでした、矢野は一寸煩さそうに横を向きました、すると其女は私を彼の傍へ連れて行つて、私を矢野に紹介したんですわ。私の事を此方は此所のナンバーワンで私の親友と紹介し、矢野の事を私の戀人矢野さんと言ひましたわ。矢野はお友達なんか見向きもせず、じつと私の顔を見つめるんです、丁度胸に波打つてゐる眞赤な心臓を見透すかの様にね、そして黙つて手を出して握手を求めました、彼の手の握力の強かつた事、私、びつくりして、矢野の顔を見ましたが、あの知らぬ顔してゐましたわ。私始めからノックアウトされた形でした矢野はバレンチノ式の美男子じゃありません。先生も御存知でせう。男性の方はどうして矢野があんなに女性に人氣があるのか不思議だと云つてゐました、先生はどう？

僕の公平な判斷から見ても所謂美男子じゃないつて？そうでせう、大抵の方がそうおつしやるのですわ、でも女性一殊に氣の勝つた、男なんかこちら愛してなんかやるものかといつてゐる様な人があの人に引きつけられるのです。あの人の何所が良いんだらう、お友達と話した時、誰もそうねと首をかしげて考へましたが、誰もはつきりした所は掴めないのです、あの人の高くて、どつしりした鼻が良いんですとか、あの人の穏やかな、然し時とすると、心臓にまで透る様に鋭い大きな眼が好きだとか言ひましたが、誰もそれで矢野の魅力を表現してゐると思へなかつたのでした、私も考へましたが、やつぱり何所といつてはつきり掴めないのです。で、私はあの人のあの穏やかな、然し人を無視した様な冷やかな、それで何所かに激しい情熱を秘めてゐる所じゃないかしらと思ひました。然し自分でもそれがはつきりと當つて居ない事を感じるのでした。矢野と一緒に居る時のあの雰囲気はどうしても現せませんわ、さうね。——どう言つたら良いでせう？、先生の様に一度が二度より矢野に逢つてゐな



い人々は尙困りますわね。先生、とにかく何かしら魅力を持つて私達には巨人の様に見えるといふ人を想像すると、あの人に近くなるかも知れませんね。言葉つて不自由なものですわね。其續きを聴いて下さい。矢野はそれから、時々やつて來ました。私は彼がラブ、ハンターである事——それはとりもなほさず女性の屈辱を意味してゐますわ——を思つて、あの人を私の前に跪かしてやらうと考へてゐました。私は今迄誰にも愛を求めた事はありませんでした。みんな向ふから私の機嫌を取らうとして、私の表情を盗み見る様な人ばかりでした。それな人達を私は良い加減にあしらつてゐました。すると尙私にしつこく迫つてくるのでした。可笑しいものですわね。惚れた弱身といふのでせうか、不思議な心理状態ですわね。相手がそんな風ですと、私は少々可哀相とは思ひましたが、見向きもしたくなるのです。矢野は餘り話しもしないで、獨りでウキスキーを翫めてゐるのです周圍がどんなに騒いで居ようが、まるで感じない機械の様に見えるのです。すると矢野だけが一番頼もしい様に感じられて、何かしら彼に好意を持つのです。矢野は別に人を魅きつけようとかそんな小細工はしてゐない様でした。でもあの人は自分がこんな風にしてゐるのが、一番良い方法だといふ事をちゃんと知つてゐるんだわ。つくろはない技巧といふのかも知れませんわ。私は矢野の女性に對する挑戦の武器を見つけた様に思ひました。それならば私の方だつてと考へて見ましたが、あの人のとりつく島もない様な冷然とした態度に當惑を感じずには居られませんでした。でも矢野だつて一人の男性に過ぎないんですもの、私には私の美しさに——己惚れてゐましたわね——結局負けてしまふだらうと無理にも信じようとしてました。今思ひますと明らかに誤算がありましたわ。確かに、私も普通の女性であるといふことを忘れてゐたと思ふね。

矢野のやつて來た時は、私はお友達と一緒にあの人と話しをしました。あの人は餘り口数は多くありませんでしたけれど、言ふ事は鋭くて、正確で平氣な様子をして話すんですの、私達はあるの人の言葉だつたら、どんな嘘の様な事でも信じさうになる巧妙な魔術師でした。あの人と話をしていると、あの人の低い聲は私達を包んでゐる空氣をびつたりと重く、それで軟かく私達を包んでしまふのでした。何かしら茫然として自分の考へなんか無くなつてしまつて、うつとりとなるのでした。阿片に酔つてゐる様な氣持でした。そして矢野が行つてしまふと、私達はほつとして、其癖何所か淋しい感じがするのでした。私は矢野の恐ろ

しい魅力にびつくりしてしまいました。私までが捕らはれさうだ。用心しなくてはと思ひました。好敵手！私はそう呼びたいと思ひましたか、私の方が向ふから壓倒されてゐるのです。私はあの人の前へ出ると、どうする事も出来ないのです。私は無理にも彼の悪い方を見ようと思いました。そして私の何かしら盛り上つて来る心を抑へるのです。ラブ、ハンター。享樂的なブルジョワ。私達の敵だ！私は心の中でさう叫んでゐました。

或夜の事でした外套の襟を立てゝ、ぶらりと這入つて来た男がありました。背の高い瘦せて元氣のない様子でした。外國の幽霊だと思ひました。其人はこんな所は始めてといふ事はすぐに私には分りました。其人の姿はこんな周圍とは奇妙な對象をしてゐました。變な氣持の悪い人と思つて私は見てゐました。其人は臆病そうに、自分の周圍を見廻すのです。其時でした。ふと其人と視線がばつたり逢ひました。其人の姿の正体を見たのです。外套の襟で見えなかつた其人の顔。見覚えのある顔、瞬間、それが、何時とはなく忘れかけやうとしてゐたあの牧師の顔と分りました。先方もぎくつとした様に私を見つめました。私は私の頬が氷にでも觸れた様に冷たく硬くなるのを感じました、嫌惡の感情、其後からチクリと刺す様な自責の感情でした。でも私は何も悪い事をしたのではないと思ひました、勝手に向ふが私を愛したので、私は別に愛して頂戴といつたのではないと考へ出しました。自己欺瞞かも知れません。いや本當の所は良いとか悪いとか判斷すべき事じやありませんわね。牧師は私をじつと見凝めてゐました。私もわざと平然な様子をしてゐました、第三者は氣づかなかつた暗闘でした。牧師はとうとう視線を落しました。

私はさすがに氣の毒に思ひましたので、何とか言つて歸さうと思つて、近づいて行きました、牧師はうつむいてしまいました。そして何も云はないのです。重くるしい沈黙でしたすると私は今度は苛々して來ました。男なら何とか挨拶したらと言つてやりたいと思ひました。牧師は口ごもりながら言ふのです。私は貴女に對して失禮な事を言つて本當にすまないと思つてゐます。そう悄然と言はれて見ると、私も氣の毒になつて、いゝえ、何でもありませんわね、過去の事は、それつきりね。此所は貴方なんかの来る所じやありませんから、お歸りになつた方が良いわと優しく言つてやりました。意外に牧師は私を怨む様な眼で見なが

ら、私は貴方をどんなに探したか分りません、私の様な地位にある者は社會から、特殊視されてゐますので、私は貴女を探すのにどれ位苦んだか知れません。でもやつと此所で貴女を見つけました。

それなのに貴女はあんな言葉で私を追ひ拂はうとなさるのです。私はこんなに貴女を愛してゐます。それがどうして貴女に分らないのでせう。貴方は私を恐らく愛してゐないでせう。でも私の此心できつと貴女を幸福にする事が出来ると思ひます。貴女はこんな場所に居るには餘りに清く美し過ぎます。私は神の御名に於て貴女を救はずには居れません、こんな風な事を一言一句力を入れて言ふので、

私はどういつて良いか分りませんでした。笑つてしまふには、相手が餘りに眞剣過ぎますし、勿論牧師に救ひ出されたくもありませんでした、で私は、私は惡魔ですから貴方の様な方と一緒に居れませんと言ひましたが、本當に困りました、すると牧師は貴女は餘りに謙遜過ぎます。貴方は御自身の價值を御存知ないのでと言ふのでした、よくあんな言葉を私に眞面目くさつて言へるものだと思ひました、牧師は貴女は外に愛してゐる人がゐますかと尋ねましたので、そんな人有りませんわと私は答へましたが、ちらつと心の中に矢野の姿の閃くのを見ました、其時でした、どうしたのだ、口説かれてゐるのかねと言ひながら冷い微笑みを浮べてゐる矢野が立つてゐました。矢野は私と牧師を惡戯らしく見てゐるのでした。私は矢野にそんな風に見られたのが、とても心外に思ひました、やつぱり心の奥底では矢野に惹きつけられてゐたのに違ひありませんわ、私は急に馬鹿らしくなつて、矢野に何でもないんです。私の一寸知つてゐる方なんですと云ひましたが、後ではつと無意識的に矢野におべつかを言つてゐる様な自分に氣づきました、しまつたと思つて矢野の表情をそつと盗み見ましたがあの人はそんな私の氣持に氣づかない様な様子でした。或は氣づいてゐてもそれを顔に出さなかつたのかも知れませんが、そうすると、あの人もひどい假面を冠つてゐた事になるわ、いやそう想像する方があのらしいと思はれますわ。牧師は矢野の言葉を皮肉に感じたらしく、急にどぎまぎするのでした、そして痴ましい表情で私と矢野をじろく見るのでした。變にそぐはない三つの感情の對立、牧師は自分の位地が不利といふ事を感じながらも、やつぱり去る事は出来ないでした、私と矢野の關係がどんなのか見極めようと自分

の波打つ感情を抑さへようとしてゐたのでせう。それがどんなに自分にとつて悲劇的結末をもたらさうとも。悲壯な可憐な騎士よと心の中では私は叫んでゐました。

あの人は自分の哀れな道化役にしか過ぎないといふ立場に氣がつかないのかしら、何て鈍感な男らしくない人、私はそう思つて冷やかに牧師を見るのでした。矢野の出現によつて、かすかな牧師に對する好感を失くしてしまつてゐる私でした。牧師はとうとう立ち上りました。蒼めて、眼ばかり鋭く輝いてゐる顔を見ると、私は何となく腹が立つて來るのです。さよならと力なく、無理に微笑みを私に示さうと、頬を歪めて、一寸矢野を流し目で睨みながら出て行くのでした。私は其悄然とした姿に氣の毒と思ふ代りに嫌惡の情を感じるのです。そしてやれ／＼とほつとしました。矢野の、のしか／＼つてゆく様な力に私は痛快を感じるのです。それと同時に、あゝ、そう／＼、私は矢野を愛してはいけないんだと思つて、牧師に好意を感じようとしませんでした。牧師に對する好意といふ事が矢野に對する私の武器なのだと思へなほさうとしましたが、どうしても牧師の姿に好感を抱けませんでした。あの慘めな打ちしほれた牧師にどうして同情を感じないのか私自身にも分りませんでした。私には同情といふ感情がないのかしらとさへ思ひました。でもひよつとしたら、矢野に對する私の本當の感情がさうさせたのかも知れないと思つて、公平な立場に立つてゐるつもりが、矢野の方に傾き出したらしいゝえ、きつとそうでしたせうが―感情をぐいと引きしめました。

それから少し経つてからの事でした、其日は私の休日でした。矢野が突然私の所へやつて來て、遊びに行かないかと言ふのでした。突飛な事をするのはあの人の癖でした。それでゐて私にとつては待ちに待つたものが來たといふ様な感じで、少しも不自然でなく、當然な事の様に見えるのでした。私は寧ろいそ／＼と矢野の申し出に従つた事を認めなくてはなりません。それな時には私はあの人に對する敵意といふものを少しも思ひ出せないのでした。私は矢野に操られてゐる可憐な人形の様でした。それでゐて少しも變な感情が私には湧いてこないのでした。とてもうら／＼かな日でした。まるで春の様な暖い日でしたわ。今でも懐しい―本當に私今でもそう思ふのですわ―思ひ出でした。はつきりと覺えてゐるわ。青い／＼澄み渡つた空、そして美しい雲が

西にボツツリと浮んでゐましたわ。私達は二人つきりで、矢野の自動車でドライブしたのでした。矢野は珍らしく雄辯にでも低い聲で私と話しあふのでした。友愛結婚とか、彼の旅行中の失敗談とか、いろんなものでした。私はあの人の傍に居る事で、しみ／＼幸福つてこんなものぢやないかしらと、臍げながら感じましたわ。私今迄幸福つてどんなものか知らなかつたのですもの其時には私は私の過去を、私の境遇を忘れてゐましたわ。私にとつてはあの人は變な形容ですけれど神様の様でした。私は此の人の手にすがつて居れば私は幸福なのだと思います。私、なんて柄にもなくロマンチストだつたのでせう。私は世間知らずのお嬢さんの様に甘い夢を描いてゐたのですわ。えー、私は甘い／＼と思つた夢―それが怖ろしい幻想的な惡夢であつた事を知らなかつたのですわ。何て馬鹿な私でしたでせう。私達は日温泉まで自動車を走らしたのでした。始めはそんなに遠く行くつもりぢやなかつたのですけれど、何時の間にか來てゐるのでした。でも今考へますと、それも矢野の深い計略だつたかも知れませんか。私は自分の方から進んで其良に飛びこんで行つたのでした。其時は薄暗くなつてゐましたので、私達は日ホテルに泊る事にしました。季節外れでとても靜でした。私達はそれが却つて氣に入りました。大きな水色の石を敷きつめた浴槽の中で泳いだりふざけたりしたのでした。私きつと其時は理性といふものを忘れてゐたのでした。私達は部屋で輕いお酒を飲みました。私は常になく、すぐに酔つてしまひました、顔がぼうつと火照つて、体に力がありませんでした。それでゐてちつとも不愉快じやありませんでしたわ、そんなになつたのはアルコールのせいばかりじやなかつたのですわ。しびれる様な感じの高調でしたわ。私はよろめく足を引きづつて、ヴェランダに出ました。しんと靜まつて人氣は少しも感じられませんでした。大きな蒼白い月がヴェランダの植木に濃いくつきりした影を投げつけてゐました。植ゑこみの樹はそよとも音を立てませんでした。私は苦惱を忘れ、社會を忘れ、私自身の存在さへ忘れて美しい自然に溶けこんでしまつたのでした。冷い空氣に觸れて、氣持の良くなつた私は、私の後に忍びよる低い足音を意識しました。私には勿論それが誰だか分つてゐました。そして私は肩に重い然し暖い手を感じました。私はそれでもじつとしてゐました。突然荒々しい力で私は抱かれました。私はよろ／＼として倒れかけました。そして大きな冷い滑めらかな葉が眼を覆ひました。其瞬間私は彼の熱い唇を感じました。私は其夜矢野に處女を捧げる様な氣持で肉体を

委ねたのでした。寧ろ私の方から進んでそうしたのでした。私には其夜は神聖な夜でした。私は生の悦びといふものを始めて感じましたわ。

私は間もなくカフェーを止めました、私は矢野との結婚生活の幸福を夢見てゐたのでした。私がどんなに柔順な優しい妻になるかしらと一人考へては微笑むのでした。私は私の過去を全然忘れてゐました。同棲して、暫くの間は私の世界に酔つてゐましたが、だん／＼落ちつき矢野を客觀的に見始めました。毎日見てゐるとあの人は何所も普通の人と違はないのでした、でも私は少しも失望しませんでした。却つてあの人に親しみをさへ感ずるのでした。あの人はあの強い腕で私を強く抱きしめて愛してくれましたわ。それから間もなくして矢野の外出の多くなつて行くのを感じるのでした。あの人は交際が廣いので、あたりまへの事で決して私を裏切る様な事をするのではないと信じおました、あの人の過去は知つておましたが、あの人は私の手によつてのみ幸福になれるのだと思つておましたし、あの人も何時もそう言つておましたわ、私だけがあの人の過去の生活を清算させる力を持つてゐるのだと信じておました、そう思ひながら心の中に黒い不吉な點がだん／＼大きく擴つて私を包んでしまひそうな氣がしました、いゝえ、そんな事はない、あの人は私を何時も愛してくれてゐるのだ、そんな風に考へるのは、醜い邪推に過ぎないと無理に信じようとした、でも矢野が機嫌よく歸つて來た時は、そんな事忘れてしまつて、子供の様に唯あの人の廣い胸に顔を沈めて涙ぐむのでした、するとあの人は心配さうに、顔を覗きこんで、どうしたの、涙なんかだして、笑ふんだよ、僕が歸つたからね、そう言つて私の涙に濡れた頬に接吻して下さいましたわ、私嬉しくてなりません。そして多い涙が止め度もなく流れるのでした、あの人が困つてね、機嫌をなほしてね、と頼む様に言ふの、あの人の眞面目臭つた子供っぽさに、私つい微笑んでしまふのでしたわ。私あの人にあんな風に言はれるとどうしても怒れないのですわ。私あの人のそんな風な所がとても好きでした。でもやつぱり餘り外出が多過ぎると思へるのです、そして或日の事とう／＼不愉快な氣持をしながら、矢野の後にそつとついて行つたのでした、あの人或るお友達のお友達の所へ行くとやつて出たのですけれど、方向反對の方へ歩いて行くのでしたわ、私は眼の前が暗くなつた様な氣がしましたわ、でもひよつとすると、何かの用事かも知れないと思ひなほして、動悸打つ

胸をしつかり抑へました。私は手がかすかに慄へてゐるのを感じましたわ、あの人がタクシーに乗つたので、私も亦後をつけました、私、此儘歸つてしまはうかと思ひました、知らない方が幸福なんですもの。でもやつぱりどんな事があるのかと見きほめようと考へました、私は私の單なる邪推であるように祈つてゐました。自動車は植物園の近くで止りまして、私は木の蔭から矢野を見てゐました。あの人すん／＼植物園の中へ這入つて行きました。そして大きな樹の下にあるベンチの方へ近づいて行きました。私は其所にスマートな洋装のお嬢さんを見たのでしたわ、ニツコリ微笑んでゐる健康さうな顔、私はもう見てゐる事が出来ませんでした。私は体中を冷い脂の様な汗の流れるのを感じました。私は急に胸が苦くなりました。私は倒れさうになる体を引きつづて、其所を逃れました。矢野に限つてと思つてゐたのに、私がこんなに愛してゐるのに、私はどうして自動車を拾つたかさへ覺えてゐませんでした。苦しい胸、激しい咳、周圍がぐる／＼廻つてゐる様でした。そして微笑んでゐる矢野の顔がクローズ、アツプされて私の前にありました。嘘つき！ 私は苦い胸の中から、そう叫びましたが、少しも憎惡の感情が籠つてゐないのを感じました。唯私自身が可哀さうでなりませんでした。私は餘りに慘めな私を發見するのです。私の部屋に這入ると、すぐ激しい咳、胸をナイフで突いた様な痛み、そしてハンカチフの上に眞赤な血。此間から少し体が惡くなつた様に感じてゐましたが、それが激しい感情の興奮によつて昂進したのでした。それは私の過去のあらゆるものをコンデンスしたものでした。私血を見ても別にびつくりしませんでしたわ、私、母と同じ病氣で死ぬのじやないかしらと思つたきりでした。

私。何も頭に浮びませんでした。頭の中は空になつた様な氣がしました。ぼんやりしてゐました。すると急に我に歸つて泣き出しました。譯もなく涙が出るのでしたわ、どうしても憎めない人、そんな事をふと呟きました、私、歸つた來た矢野を見ると又涙が出て來ました。私どうしてこんなに、意氣地がないのかしらと思ひました。でもどうする事も出来ませんでした。矢野は心配さうにどうしたの、体でも悪いのかね、と言ふのでした私、泣くのをやめて、きつと矢野を睨めました。矢野は別に常と顔色も變つてゐません。私は私の見たのが間違ひだつたのかしらとさへ考へようと思ひましたが、いゝえ、私の此眼ではつきりとあの人のランデヴーを見たのだ。間違ひでば決してないと思ひました。私は小さい聲で呟く様に言ひました。貴方つたら、今日植

物園で——、私それ以上言へないのです。私の言葉には哀れな自分を悲しんでゐる様な調子で、矢野を責める様な響のないのを淋しく思ひました。矢野はさすがに一寸顔色を變へましたが、やつぱり落ちついて、あれか、あれは何でもないんだよ。僕の友人の妹だね。就職の事を頼まれただけなんだよ。それを、それを、そんなに泣いたりなんかして、ね、笑ふんだよ。君は笑つた時が一番奇麗だよ。そんなに言つて、私を慰めようとするのです。私、黙つてゐました。嘘！嘘！嘘つき！私は心の中でそう叫んでゐました。それから何だか變にそぐはない感情で私達は暮したのでした。矢野は益々外出をするやうになりました。でも何時も優しい言葉を、出がけに私にかけてくれました。私はそれを、硬い表情で受けてゐるのです。私は私があんなスバィの様な眞似をした事をつくづく後悔しました。あんなに幸福だつた生活を自分から覆したのでした。それが偽られた幸福にしろ、知らない方が幸福でしたわ。私、私、でもどうしてもあの人情めな。私にはあの人の良い所ばかりが心に浮んで來るのです。私、始めてあのお友達の言葉の意味が分つたの、矢野もやつぱり淋しい不幸な人だと思ふわ。そうして不安定な社會の、あの人の地位の不満とか、不安とかを消す爲に、あんな世紀末的な遊戲——實際そうでした——を弄んでゐるのですわ。

あの人の様な人、決して幸福になれないわ。あの人は自分で自分の体を傷つけてゐるのですわ。あの人は恐ろしい心理學者ですわ。丁度魚を釣る時を知つてゐる様に、私達の弱點を適當な機會に捕へるのですわ。

悲しいロマンチストの崩壊！惡夢を見續けてゐたのだわ。でも其惡夢は私を苦める代りに、私に甘い感情を與へてくれるのです。私は尙此惡夢にうなされた様な氣がするのですわ。私、餘りに感情に溺れ過ぎてゐますわね。

私は私達の階級の裏切り者ですわ、之からの人達は私の様な感情一方の戀愛を清算しなくてははいけないと思ふわ。戀愛を生活の一部としてこそ新時代の人たる資格があると思ふわ、決して私の様な道を歩んでははいけません。でも新しいものゝ建設の前には、私は甘じて礎石の一つとなる心はやつぱり持つてゐますわ。あ——そう——未だ言ひたい言葉があるわ。それは私、何かの書物で見たのですが、それはね、戀愛は相方の誤解より起る。どう面白い言葉でせう。其意味ははつきりと何時か誰にも分りますわ。あの牧師、今頃どうしてゐるかしら。



「おや、先生、何所かで時計が鳴つてゐますわ、ほら、聞えるでせう。1、2、3……12、十二時ですわ、一日の終りですわ。私の一生の終りにも十二時の音が聴きたいわ、それは古いものゝ終りを意味し、新しいものに祝福を授ける音ですわ、おや先生、何て悲しそうな顔をしてゐらつしやるの。私——私、こんなに快活ですのに、可笑しいわ、先生、ホ……」。